《特集2　釜ケ崎の歴史　その二》

雑草という草はなし（上）

――"釜ケ崎"の歴史と栄光ある伝統について――

岡田宇土

☆　☆　☆

それは十年も前のことだったか、「釜ケ崎」がお上によって「愛隣地区」と名をかえられたのは。アリガタヤ、アリガタヤと口先でいっても、仲間たちは、そんなアリガタメイワクな、そしてみじめったらしい名前を、誰一人として使わなかった。そうだ。「ありりん労働者」なんと言われると魂をぬかれるような気がするじゃないか。オレたちは「釜のアンコ」なんだ。クズといわれ、落伍者、怠け者とよばれてきたオレたちにこそ〈栄光の歴史〉がある、という一読者の投稿なのだ。

わが国の資本主義は、日露戦争、オ一次世界大戦を経過し、その当然の過程として、景気、不景気を繰り返している。とくに初期のそれの、になり手であった繊業の中心地である大阪では、景気の変動は、いっそう激しかった。国家権力と結び付いている多国籍的な企業は、必然的に、ある時は低賃金の供給源となる処、又ある時は、老廃し枯渇した労働力の廃棄場所ともなる地域を、前もって用意しておく。

わが釜ヶ崎は、これ等を押しつけられ、決して長いものには巻かれろ式の次元ではなく……一手に引き受けてたくましく生きて来たのである。

特に資本主義が、いびつな発展をとげた、この国では、農村の社会分解による人口の都市への過度集中は、著るしい。この中の、真に已に正直な、人間そのままの労働者によってわれわれの釜ヶ崎は、いよいよ拡大し、密集化して行くのである。

釜ヶ崎は本来、決して無法地帯ではない。あらゆる犯罪の温床になりやすい性質はあっても、大多数はいわゆる、善良すぎる市民なのである。唯、定職を持たない、かりに持ったとしても、きわめて不安定な職業にしか就けないと云う仕組に、しばられている事に、人々が目を向け始め、無気力な永い間のあきらめにも似たものと、訣別の姿勢を示しはじめている偉大な、ブロックなのである。

言うまでもなく、徳川時代からひき続いた長町とべくわしくは後述）明治以降の、この名誉ある釜ヶ崎とでは、その性格は大いに異るであろう。

だが、その性格の異なった新しいスラムこそ、近代資本主義の落し子と見なければならない事は、言を待たない。

釜ヶ崎のはじまり（巻）

先ず、釜ヶ崎という地名の起源については、さまざまの巷説があり、中には随分と、礼を失したコジツケ話が、地域人の生活実態を、冷笑しているし、又、それが通例となっているしまつである。

〝大阪府誌〟によると明治三十三年四月一日、ここら一帯の地名改称を行ない、今宮村のうち字水渡釜ヶ崎、釜ヶ崎の地、二町八反一畝八歩をもって水崎町としている。現在は、本来の地域とは少し南にずれているが、とに角、この地名が存在したことは間違いなく、釜ヶ崎の名誉のためにも、あえて、巷説を肯じなかった訳である。

さて、この釜ヶ崎の地に、集落が発生し始めたのは、いつ頃であろう。さきの地名改称時との符合関係からは、今宮式附近の地にぽつぽつ集落が、発生し始めたことを表している。

そして明治三十六年、内国勧業博覧会が、今の天王寺公園、新世界一帯を会場として開かれた。この時、治安維持のためと稱して、大阪周辺の細民達は、会場より先の住吉街道に沿った今宮村に、移されたのである。

この今宮村は、野菜の産地として畑場とも呼ばれていたが、この釜ヶ崎の一帯は〝水渡釜ヶ崎〟の地名が暗示するように、低湿の泥濘地で、大雨でも降れば、すぐに水浸しになるという劣悪な条件の地域であった。それにもかかわらず、一年にして数百世帯が住むようになった。簡易宿泊所を必要とする人々や、下層民の連帯意識の純正さ……、そして心の故郷的な集団雰囲気には、いかなる権力とても、歯がたたない要素が、厳としてあるのである。雑草という草はない。一ツ一ツに必ず名があり、生命がある。

現在の釜ヶ崎の主人公は、この伝承者であり、いまドヤに住んでいるとは言っても、決してドヤ経営の背後や、安全・人権無視の、待遇には、無関心ではない者達の集りなのである。

がんらい、大阪市内には〝崎〟と云う地名が少くない。これは淀川の川口に堆積した土砂の上に開かれたからで、蜘蛛にも分流する川にはさまれた地域に、先端は〝崎〟をつけて呼ぶことが多い。古くは難波崎という地名が史上に名高く、木津川が沿に注ぐ処にも、崎をつけて呼ばれる地域があった。これは、地域の端とか、隅として意味づけるものが多く、この釜ヶ崎の〝崎〟も、こうした点に、起ったものとして考えて差しつかえない筈である。尚、釜に就いては、ここら辺りは、釜の底のように海が入りこんでいたから……と云う説もあるが、之は勿論、確かではない。